利用者名：医療保健学部　リハビリテーション学科　作業療法学専攻　助教　柴橋 広智

Title:	Mapping multidomain assessment tools for home-visit nursing and rehabilitation: a scoping review
論文名（和訳）	訪問看護・訪問リハビリテーションにおける多面的評価ツールの体系的整理：スコーピングレビュー
Authors:	柴橋　広智(東京工科大学　助教)、大野　勘太(東京工科大学　講師)、澤田　辰徳(東京工科大学　教授)
Journal:	BMC Health Services Research
掲載年月	2026 年 4 月

研究概要：訪問看護・訪問リハビリテーションでは、病気や身体機能だけでなく、心理面、生活環境、家族の介護負担なども含めた評価が重要です。本研究は、国内外の文献を体系的に調べ、在宅での支援に活用できる多面的な評価ツールの特徴と課題を整理しました。421 件の文献から 8 研究・8 種類の評価ツールを特定し、評価する領域の偏りや、信頼性・妥当性の検証不足を明らかにしました。

研究背景：在宅療養者は、複数の病気、生活機能の低下、心理・社会的な問題など、相互に関係する課題を抱えています。看護師とリハビリテーション専門職がこうした課題を共有するには、共通の視点から状態を捉える評価が欠かせません。しかし、既存の評価ツールは職種や目的ごとに開発されたものが多く、在宅療養者の多様なニーズをどこまで把握できるかは十分に整理されていませんでした。

研究成果：PubMed、Scopus、CINAHL の 3 データベースを検索し、421 件から採択した 8 研究（2004～2024 年）の評価ツールを比較しました。身体機能や医学的状態は多くのツールで評価されていましたが、心理・社会面、栄養状態、介護者の負担、本人が感じる健康状態や困りごとを扱うツールは限られていました。また、ツールごとに評価目的や範囲が異なり、信頼性・妥当性の検証も一様ではありませんでした。多職種で共通して使用でき、在宅療養者を幅広く捉える評価の仕組みが不足していることが示されました。

評価領域	本研究で確認された傾向	今後の課題
医学的状態・身体機能	多くのツールが評価	多職種での情報共有
心理・社会面	扱うツールが限られる	生活背景も含めた把握
栄養・介護者負担	十分に扱われていない	見落としやすいニーズの把握
本人による評価	取り入れられる機会が少ない	本人の感じる困りごとの反映
測定の確かさ	信頼性・妥当性の検証に差	検証と実用性の確認

社会への影響：本研究は、訪問看護と訪問リハビリテーションに共通する評価の課題を整理し、新たな評価ツール開発の基礎資料を提供しました。身体面に加えて心理・社会面や介護者の状況も確認できる仕組みは、多職種間の情報共有や、見落とされやすい支援ニーズの早期発見につながることが期待されます。今後は、日本の在宅医療・介護の実情に合った評価ツールを開発し、その信頼性、妥当性、実際の訪問場面での使いやすさを検証する必要があります。

専門用語：

スコーピングレビュー：ある研究分野の文献を幅広く調べ、どのような研究や知見があるか、何が不足しているかを整理する研究方法。

多面的評価ツール：身体機能、病気、心理・社会面、生活環境など、複数の領域を組み合わせて状態や支援ニーズを把握するための評価方法。

信頼性・妥当性：評価結果が安定して得られるか（信頼性）、評価したい内容を適切に測れているか（妥当性）を示す性質。